



- 生命 -

僕の名前は「スラ」洞窟に住んでいる。産まれた時からここにいる。紙に「スラ」と書いてあったから、これが僕には何かはわからない、ただお腹が空いた時、動物を殺して食べている。それも武器がわからないから、素手で勝負している。時にはライオンと戦って殺されかけた時もある。鼻の長い動物、「象」は僕の好物だ。そして仲良しになった、お猿さんとは一緒になって遊んでいる。遊んでいると、お猿さんが、みんなであっちに行けという、そしたら光っている「葉っぱ」があった。お猿さん達は逃げ、僕は木を飛び越えて「黄金の葉っぱ」まで行った。

「・・・」なんだか食べてくれと言っている気がしたので食べた。

嵐が起こり、雷が鳴り、雨が降った。そして目が赤くなり、筋肉が倍増し、髪の毛が長くなった。

「をぉー」そして一瞬にして雲ひとつない天候になり。宙に浮いていたのに一気に地面に叩きつけられた。

そして1日が過ぎると、僕と同じくらいの透明な女の子がいた。

「アーアーアー」「なにあなた、アーアー言っているけど名前は？」「アーアー」「それじゃわからないわよ、私はスラっていうの」「オ、ア」「そう、ソマよ」「ソ・マ」「言えるじゃない」そして、僕は逃げた。そしたら、ソマは僕の後を追って来る。そして僕の洞窟へと辿りついた。「へー、ここにあなたの名前が書いてあるわ、あなた、スラっていうのね、言ってごらん、スラって」「う、あ」「うーあーじゃ無くて、スラよ、わかったわ、あなたに言葉を教えてあげる、言葉わかる？」「お、お、な」「おおなは、大きなお花、お花わかる？」「おはな」「そうお花」「この緑色が成長するとお花が咲くのよ」「えいおう？」「えいおうは栄光な事、栄光は立派な事よ」「いっば？」「いっばはいっばいって事、わかった」「わらった」「はは、笑った笑った」そして、スラとソマは1年かけて言葉を使って話した。

そしてソマは行った。「そろそろ、言葉は卒業よ」「わかったよ、ソマ、俺、宇宙で一番の男になるから」「今まで、ここにいてよくそんな事が言えるわね」「俺は、人間とは言わない、宣言人という」「なにそれ、お猿さんとも友達だもんね」「僕は、どんなことよりも大きく、どんなことよりも小さいんだ」「どっちかわからないじゃない」「ようやくってこと」「頑張ったわね」

そして、ボロボロの服のまま、二人は深い森の中を抜けようと、ひたすら歩いた。

そうすると、綺麗な滝があった。そこにはライオンや象がいた。「こんにちは」そうすると象が水をかけてきた。僕も水をかけ返した、「ねえ、象さん、もしよかったら、人間の所まで一緒に行かないか？」そしたら、象は怒りだし、僕を頭で殴った。「ごめん、ごめん、君は自然が好きなんだね、僕がいつか守ってあげるから安心してね」そしたら、ライオンが「ガオー」と鳴いた。鳥達が飛び立ち、そこを立ち去った。

「ねー、私疲れたんだけど、私、先に行っていていい？」「えっ、先に行ったらわからなくなっちゃうよ」「きっとわかるわよ、ずっと先で待っているわ」ソマは上へ上へと消えて行った。僕は思った、森もいいけど、人間の世界ってどんなだろ、そして、ソマに会えると信じた。そして

、歩いていると、車がきた。そして、銃を向けられた。「君、なにしてる」「僕、実はここで育ったものです」「なに、親に捨てられたのか」「親?」「君は親を知らないのかね?」「すみません、親はわかりません」「君を産んだ人の事だ」「僕を産んだ?」「なんで、言葉を喋れるんだ」「友達が教えてくれました」「この森に友達なんかいないだろ、君は、君は、、、ちょっと来なさい」「はい」僕は車に乗せられ、昔、ライオンに乗った時の事を思い出した。「えー、一名、森の中に人間を発見、直ちに、検査を行う、準備しといてくれ」「了解、ビッ」僕は、なんか嫌な予感がした、そして聞いてみた。「これから、どこに行くんですか?」「素晴らしい所だよ」そして気を失った。

目が覚めると、拘束され動けなかった。「さーて、君の名前は?」「ス・ラ」「なんで、言葉を喋れるんだ?」「実は、、黄金の葉っぱを食べて、気を失ったら、友達が現れました。」「その名前は?」「ソ・マ」「本当に友達が現れたのか?」「はい、でも、いつも透明でした」「ほー、きっとそれは妖精っていうんだ」「妖精?」「精霊とでもいうのかな、それと、黄金の葉っぱとはなんだ」「猿が教えてくれたんです、あっちに行けと」「それは、どこらへんだ」「それは、わかりません」「ふむ、では、今から、ジャングルへ向かう、黄金の葉っぱを食べれば、妖精が見える、それは高く売れるぞ」「高く売れるってなんですか?」「いいか、君も黄金の葉っぱのありがたがわかった後、君を売る、煮るなり、焼かれるなり、何なりとされるがいい、なんたってジャングル育ちだからな、はっはっはっ、いいものを見つけたぞー」そして僕はロープで縛られて、車に乗せられた。「どこだ、どこにある、黄金の葉っぱ」「大佐、きっとないですよ、僕、今までジャングルにいたけど、黄金の葉っぱはその一枚しかみた事がないです」「いや、ある、君はみたんだろ、食べたんだろ、その場所だけでいい、見つけたまえ」「でも、道覚えてないですよ」「君が暮らしていた所は覚えているだろ?」「覚えていません」「止めろ、いいか、思い出せ、俺はお前を救っただろ、黄金の葉っぱさえ取ればいいんだ、それさえ見つかればお前にもお金を分けてやる」「本当ですか」「そうだ、人間はなお金がないと生きて行けないんだ」「あなたはなんでそんなにお金が欲しいんですか?」「それは、全てだからだ」「違いますよ、お金が全てでなく、生きるが全てですよ」「お前は何もわかつちゃいない、お金があれば全てが手に入るんだ」「全てを手にして何になるんですか?」「ん?」「金に目が眩んでるだけ、でもね、僕も生きる上でお金は必要だと思う、それでも楽しくないと生きているって思えない、あなたは生きていて楽しいですか?」「んー、わかった、お前、俺たちのグループに入れ」「いいですよ」「俺たちの仕事は、動物の密輸だ」「いいですか、珍しい動物がここにはいます、でも、殺すのはよくありません、だから、殺さないで、ペットとして売りましょう、それなら飲みますけどいかかがですか?」「そうか、それなら、高く売れる、ペットショップか、よし、動物殺すと刑罰になる。新しい動物見つけて、ペット申請出せばいいんだな。仕方ない密輸辞めよ」「よし、引き返すぞ、出直した」そして、大佐は基地へと帰った。

「スラ、お前、カップラーメン食べた事ないだろ」「なんですかそれ」「いいか、お湯わかるか?」「わかりません」「あったかい水だ」「いいかとおきなプレゼントをしてやる、おい、お前達、お湯沸かせ、とりあえず、仲間達についていけ」「サー」スラはシャワーを浴びた。こんな素晴らしい暖かくて、気持ちのいいのは初めてだ。風呂が沸きお湯に浸かった。僕

は人間に産まれた事を嬉しく初めて思った。生きていて幸せだ、心の底から思った。「大佐、お風呂、最高でした」「そうか、俺たちは金はあるが、最初だけご褒美だ、しっかり働けよ、はい、カップラーメン」今までにない美味しそうな香りがした。「これ、食べれるんですか？」「そうだよ、肉よりは美味しいと思うぞ、まー肉も美味しいけどな、お前、妖精にラーメン教わらなかったのか？」「知らないですよ」「妖精はご飯食べてたのか」「食べてましたよ」「なぬ」「しまうまが好きみたいでした」「よ、妖精って、肉食うのか、こりゃ問題だ、おい、お前たち、なんつったけ、えー、よ、妖精を探せ、後はこっちでなんとかするから」「サー」「食べてもいいでしょうか」「待ってよ、お前に男のロマンを教えてやる」「いいか、カップラーメンを食べる時はな、3分息を止めるんだ、わかったな」「今日は特別だから、息は止めないでもいいけど、次に作る時はそうしろ、わかったな」「サー」「食べていいぞ」「ははっ、ズーっといけ」「ズーとですか」「絶対にこぼすなよ」ズー。「アッチー」「ゆっくりだ、ゆっくり味わって食べよ」「最高に美味いっす」「どうだ、美味いだろ」つい、スラは泣いてしまった。

僕は動物は殺さないという約束を約束して大佐に洞窟の場所を教えた。

「お前、ずっとここにいたのか」「動物達と会話楽しいですよ、みんなもきっと人間達が与えてくれるご飯楽しみにしてると思うんです」「動物達と喋れば、珍しい動物もわかるな」「あっ、大佐」「なんだ」「猿達がまた、こっちに来いって言っています、どうします?」「何があるんだ」「黄金の葉っぱだと思います」「なに」「でも、大佐が食べる時と違う世界になります」「ばかやろー、俺をなめるんじゃない、行くぞ、どっちだ」「いいんですね、なかなか見れないものだと思います」そして同じ場所に黄金の葉っぱはあった。「大佐、絶対に辞めた方がいいです、見るだけにしましょう」「凄い、食べるとどうなる」「大佐の場合死ぬと思います」「そんな、葉っぱ食べたくらいで死ぬなんて冗談よしてくれよ」大佐は木をよじ登り黄金の葉っぱを食べた。木から落ち気を失った。そして1週間起きなかった。「あー、変な夢見た」「大佐、大丈夫でしたか」「ん?何もない、声だけが聞こえる」「闇こそ光だと思います」「見えるのか?」「見えますよ」「トランシーバーで仲間を呼んでくれ」「サー」「大佐が視力を失いました、助けて下さい」「お前、なんかしたのか」「黄金の葉っぱを見つけて、大佐が食べました」「そうか、今から向かう」車にあった探知機を元に仲間が助けにきた。ペットショップに帰ると大佐は寝込んでしまった。「大佐、大丈夫ですか?」「なんか、見えないんだけど、見えない世界が見えるんだ」「どうゆうことです」「なんか、動物達が鳴いたり、ワニが出てきたり」「大佐、病院行きます?」「いや、なんか思うんだ、ソマが治してくれるって気がする、スラはいるか?」「呼んできます」「なースラ、仲間と何匹か珍しい動物を捕まえてきて、その後、ソマを探してくれないか?」「ソマがなんとなく僕を呼んでいるのがわかります」「そうだよな、俺が見てる世界もソマを呼んでいるんだ、お前はなんとなくわかるのか?」「なんとなくわかります」「そうか、じゃあ仕事だな」「サー」仲間と珍獣を見つけ餌を探しペットショップで販売した。そして、仲間にどうか水だけは忘れないで欲しいと言って、ソマを見つけたら必ず戻ると伝えソマを探した。

「そこで待っている」僕なりの感性でこの街の大きな木のある下にあるそこにいると確信していた。大佐にももらったお金で水だけ買ってそこで待つ事にした。ここだろうと推測したが1週間しても現れなかった。僕の感覚が鈍っているのか?現れるはずなんだろうと思ったが違っている事に気付いた。「近くていいんじゃないの逆」そういえばなんか言っていたな。僕は今ここにいる逆の場所へ向かう事に決めた。ひたすらまっすぐ何があってもまっすぐ海も山も谷も崖も全部、ただひたすらに。

そして60年ひたすらに歩いた。草を食べ、肉を食べ、魚を食べ、時には虫までも食べた。

丸が続いている

疲れていた

だんだんと小さくなる

その中に

こ

こ

が

ぎ

や

く

そして彼女ソマがいた

妖精だった彼女が人間に戻った

「空飛べなくなったじゃない」

「ここにいるよ」

どこかにいる、そして、今いる事、過去があって、今、そして未来へと繋がる思いが届くように
そして新しい毎日を楽しめるように。

草薙文雄